

# J O F I 東京通信

第6号 平成30年1月15日発行  
<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機体会報誌

## 目次

|                                          |            |    |
|------------------------------------------|------------|----|
| 日々是精進                                    | 鈴木 伸一会長... | 1  |
| 初心を忘れず                                   | 西藤 俊秀..... | 2  |
| 「天然アユを取り戻すため 今できること」<br>シンポジウムに参加しての感想   | 新井 勝之..... | 2  |
| 数字で振り返る 2017 年                           | 泉澤 和行..... | 3  |
| 第 37 回 世界フライ・フィッシング・チャン<br>ピオンシップスロバキア大会 | 粕谷 正光..... | 4  |
| 今年新たに挑戦してみた釣り                            | 鈴木 伸一..... | 10 |
| 釣りの潮目 (その2)                              | 四条 徳明..... | 12 |
| お宝コーナー.....                              |            | 13 |
| 2017 年度活動実績.....                         |            | 15 |

## 日々是精進

鈴木 伸一会長

近年の釣りの様子を見ていますと、釣竿や釣り糸、疑似餌といったハード面は大いに進化し、それに伴い、海面の釣りにおきましては、例えばタイラバ、ひとつテンヤ、アジング、ハゼクランクなど、ライトタックルやルアーを用いた新ジャンルの釣りがいろいろと考案されるようになり、また、釣り公園などにおきましてはタックル類一式がレンタルでできるようになり、手ぶらで出かけても手軽に釣りが楽しめるようになってきました。

内水面の釣りにおきまして、若い人の間ではエリア・フィッシング、テンカラといった疑似餌を使用した手軽にできる釣りに人気が集中しているように感じ、釣りの潮流にも大きな変化が出てきたように思っています。

一方、海面の釣りにおきましては和竿を使用した江戸前のハゼ釣り、黒鯛の落とし込み釣りなど、内水面の釣りにおきましてはタナゴ釣り、ヘラブナ釣り、アユの毛鉤釣りと言った季節に応じた我が国古来よりの釣りも見直されるようになってきているように思っています。僅かながらではありますが、そのような釣りにも関心が集まってきている事実も見逃せないことだと考えています。

全釣り協公認釣りインストラクターの任務には、「一般の釣り人に対し、釣りの技術、釣り場でのマナーおよびルール、水産資源の保護意識の向上、環境保全、釣り場での安全等について具体的に指導する。」がありますが、釣りの技術はハード面の進化に伴い日々進化していくもので、指導していく立場としては、ひとところに留まっているのではなく、常に時流に合わせた釣りの技術向上に努める必要があるのではないのでしょうか？

JOFI 東京も僅かずつではありますが若返りを図っています。従来からの会員の方には今風の釣りにも触れてみたり、若い方には忘れられがちな我が国古来よりの釣りにも挑戦して頂いたり、各々にとっての引き出しを増やすためにも、今まで以上に釣りの幅を広げていただけたらと思っています。

広くアンテナを張って、インターネットや釣り雑誌から最新情報を得る努力や、ときには釣り道具屋さん巡りも良いことだと思います。ところが、釣りに関していえば、実践してはじめて分かることも意外と多いのではないのでしょうか？ 特に不意に釣り人が口走る釣り用語、ジャンルの違う釣りではときとして外国語のように聞こえることも.....

来年度は首都圏 JOFI とも連携・協力し合い、様々な釣りの経験ができるような機会を企画したいと考えております。そのような機会が実現できた折には是非参加していただいて、自分にとって新たな釣りにも挑戦していただけたらと願っています。

## 初心を忘れず

西藤 俊秀

私が JOFI 東京（当時は JOFI 城東）に入会してから 17 年も経ってしまいました。入会当初に書いたものを改めて読み返し、初心を忘れないように心掛けたいものです。

先ず、酒を片手に「中国のことわざ（?）」に触れてみましょう。1 時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい。1 週間、幸せになりたかったら結婚しなさい。1 ヶ月、幸せになりたかったら新しい家を建てなさい。でも、一生、幸せになりたかったら釣りを覚えなさい。

次は、姿勢を正して「サライの特集（1998 年 7 月 2 日小学館発行）」に対座してみましょう。古来、釣りには五つの徳があるといわれる。健、忍、寛、尚、楽。身体によく、我慢と寛容の心を育て、高尚なる精神に導き、人生を楽しませてくれる。世にたくさんの道楽があるが、間口の広さと奥の深さという点では、釣りが筆頭格だろう。（中略）古きよき日本の釣りの姿と道楽にひそむ深い精神性に確かな目を向けたい。

更に、五木寛之著「大河の一滴」の一節にも目を向けてみましょう。趣味といえど軽く聞こえるが、ひょっとしたら生きる目的にもなり、生き甲斐にもなる可能性がある世界だ。さらに踏み込めば自然や宇宙の神秘に触れるような境地まで達することができるかもしれない。

ここまでの語りは、日頃の釣行に関しての釣り師の美しすぎる「正当化」なのではないでしょうか。それとも、釣りバカの単なる「言い訳」にすぎないのでしょうか。私は、こう考えます。この問いは釣りを愛する者にとっての難題（永遠のテーマ?）であり、その答えは周りの人達にゆだねるべきだと。

では、美しい語りが実現できるように自身も研鑽し、周りも巻き込むことは可能なのではないでしょうか。そんな想いを胸に当支部での活動を通じて、小さなこと、私のできることから始めてみたい。

## 「天然アユを取り戻すため 今できること」シンポジウムに参加しての感想

新井 勝之

2017 年 11 月 23 日に 鈴木会長に誘われて 日本アユ毛バリ釣り団体協議会主催、東京アユ

毛バリ釣り研究会協力の会報アユ毛バリ通信 30 号記念シンポジウム 2017「天然アユを取り戻すために今できること」に行ってきました。たまたま予定が空いていたので何の気なしに参加したのですが、内容としては 第一部 鮎研究者 高橋勇夫氏の基調講演、行政機関より 東京都水産課主任 斎藤俊二氏の講演、秋川漁業協同組合組長 安永勝昭氏の 3 氏による講演で、天然アユを守り育てる具体策、そしてこれからの課題を探ります。第二部は釣り人代表（落語家 林家彦いち師匠）の司会で、参加者の質問に講演者が応える質疑応答タイムです。

鮎研究者 高橋氏の基調講演では「アユ資源の減少に対して、毎年多くの河川で大量の稚アユの放流に寄って 増やそうとしましたが、河川の荒廃、気候変動、冷水病の蔓延やカワウの食害などがあり、その地域によって異なります」との事でしたが、私の知る河川でも同じような事が言えます。その中でもひどいのが秋田県の河川で、天然アユの遡上が多く、毎年多くのアユ釣りファンで賑わっていたのですが、地元の漁協が利益目的に養殖アユを放流したのですが、冷水病に侵されたアユが入っていた為に天然アユにまで感染してしまいかなりの被害が出た上に 台風の洪水により河川が荒れてしまい、更に改修工事が追い打ちをかけ、かつてのアユ釣り師にとっては 楽園の様な処だったのが 消え失せ手しまう事態になってしまいました。

高橋氏の天然アユを増やす方法は 天然アユの資源変動を探り、保全対策を構築することでした。アユ産卵場を造成し、遡上するアユの妨げになっている堰を超えやすくするために費用の余りかからず上りやすい魚道の整備を行うことで、実際に増えた河川があり、実証されたとのことでした。

最後に加藤氏は「人とアユ」について話されましたが、天然アユは自然資源なので、これからもずっと絶やすことの無い様にしなければならないので、かわりのある人、漁協、行政の努力が問われとの事でした。しかし近年、ウナギの様に急激な減少問題が起きなければ対策を講じない関係者がとる行動は、単に絶滅危惧種に指定したり、完全養殖化することで歯止めをかけようとしているとしか思えないです。かつては天然ウナギで有名でした利根川も河口に近いところで堰を作った為に汽水域が無く成り、遡上するウナギや他の魚類が減ることは目に見えて明らかであります。

次に講演した、東京都産業労働局農林水産課漁業調整担当官 斎藤氏の講演では「多摩川天然遡上アユの採捕事業について」でした。多摩川では、水質

改善により平成22年より、遡上量は増えたにも関わらず、8箇所の堰に阻まれ、上流域に達するアユはほとんど無く、天然アユを活用するために平成26年度はまとまった数量を採捕する適地を選定。

27年度 適地に合った漁具、生け簀の種類選定。  
28年採捕、蓄養を実施し、採捕、蓄養から運搬放流手法確立。と言った3年計画を立て実施したそうですが、解説の中でも採捕用の漁具を作るのには苦労の跡がうかがえるものでした。

平成26年度10,181尾(3カ所13日間)  
27年度46,155尾(3カ所17日間) 28年度118,299尾(2カ所12日間)、汲みあげ放流は27年度30,298尾、28年度90,000尾(1万尾を養殖試験のため都内養魚場へ) 汲みあげアユの大きさは5センチ1g、汲み上げアユの追跡調査、28年8月12日、潜水による目視10～15センチで中には縄張りを持つ20センチも観察された。まとめとしては、採捕場所と遡上タイミングが合えば10万尾採捕が可能であり、上流域に汲み上げ放流で成長し、法流種苗として活用できるし、又、養殖種苗としても活用出来ることも判明した平成29年度より東京都内水面事業として事業を開始。

かいつまんで書きましたが、東京都でこのように取り組んできた事業が有ることに驚きと感銘を受けました。斎藤氏をはじめ、関わった人たちの努力が実り、これからの多摩川の天然アユが増えれば、他の魚類にも良い影響が出る気がします。

最後の講演に「我が漁協」秋川漁協組合代表理事組合長 安永氏の講演では、多くの内水面漁協が赤字で、放流魚の減少や管理不足による荒廃している中で、黒字化に成功し、特にアユに注力し、稚アユのサイズを小さくしてその分放流量を増やし、アユの居る川から掛かる川に変身させ、また、浄化が進んだ多摩川では遡上量が増えた天然アユを都水産課の指導と協力を得て、汲み上げアユを多摩川上流と秋川に放流したところ成長し、友釣りの対象になり、都内水面漁連とともに事業化して、資源の有効活用を目指しています。また、秋川アユのブランド化を目指し、昨年清流アユの食べ比べ「第19回清流めぐり利き鮎会」に参加し、2回目にして準グランプリを獲得。これは河川のゴミ拾いなどして環境整備を行ってきた努力が結集したのだと感じました。

安永氏の講演でしたが、ただ魚を放流し入漁料を徴収して採算を合わせるとか、他の援助金をあてにしている漁協では先行きはダメになるのはあたま

で、秋川漁協をモデルにし、改善する所が増え、気持ち良く釣りが出来る場所が増える事を望みます。

第二部では参加者が講演者に質疑応答が盛んに行われ、あっという間に予定時間を終了しました。

参加者はアユ毛バリ釣り会のメンバーが大半だと思いますが、私としては、アユの毛バリ釣り師が大勢いるのと天然アユに熱い拘りを持っているとは思いませんでした。アユ釣りと言えば友釣りが一番盛んで、天然アユに拘りを持つ人も大勢いて、遠くへまで行く事をよく聞きます。私も釣り師として天然魚を求めています。釣り方や魚種が違ってても常に頭にあるのは天然魚を釣る事なので、みんなが協力し、良い釣り場が出来ることに関わらなければいけない事を痛感しました。

※日本鮎毛バリ釣り団体協議会主催2017年11月23日配布の資料参照しています。

## 数字で振り返る2017年

泉澤 和行

最近の私は、管理釣り場主体のフライ・フィッシングを楽しんでいます。年初でもあり、2017年の釣行を数字で振り返りたいと思います。

① 釣行回数 : 82回(養沢43回、秋川湖26回、芦ノ湖4回、王禅寺4回、開成2回、忍野2回、湯川1回)

諸先輩によれば、年間総釣行回数が100回を超えると離婚の危機が迫るそうですので、気を付ける必要があります。

② 釣果(匹数): 2,955匹(ニジマスが中心で、ヤマメがこれに次ぎます)、1釣行平均36匹でした。

管理釣り場主体ですのでこれ位釣れて当たり前です。

③ 釣果(サイズ): ニジマス64cm(4月19日秋川湖にて)



東京でこのクラスが釣れる管理釣り場が出来たことは有難い限りです。

- ④ 印象に残った魚： ブラウントラウト 47cm (4月2日養沢にて)



秋川の支流の小溪流・養沢川でのタマズメ、16番のドライフライに突然出てきたので驚きました。

- ⑤ 保有タックル数： フライリール 45 個、フライロッド数 51 本

長年コツコツと中古主体に購入した結果、1年では到底使い切れない数になってきました。使うというよりは、収集癖が嵩じてきた感じです。今年購入したもので特に気合を入れたのは、ウィンストンのロッドで、初の生涯保証が付いていました。



2018 年も元気で安全な釣行を旨として、ほどほどに楽しめればと思っています。

## 第37回 世界フライ・フィッシング・チャンピオンシップスロバキア大会

2017 9/3～ 9/13

粕谷 正光

9/3

7:09 成田でカウンターがまだ開いていません。

1 時間ほど待つてチェックイン。荷物は二つ。一つは制限ギリギリの22、5kg。もう一つは10kg未満。毎回、釣り道具の重さには悩まされます。

14:41 アムステルダム到着。  
ユーロ圏の入国審査を受けて乗り継ぎです。





19:05 ウイーン到着。

もう、ユーロ圏は国内旅行だから、預けた荷物を  
受け取って、ホテルまでは荷物を引き摺って行ける  
はず。グーグルアースでシュミレーション済みだし。  
ウイーンで一泊。

9/4

今日はニューヨークから到着するキャプテンの  
I村さんと到着口で待ち合わせです。  
沢山の荷物を車に詰め込んで、Liptov Slovakiaへ  
と向かいます。走行距離300kmほどで、ホテルに到  
着。



周りには何にも無い森の中の一軒家。早くも草は  
枯れ、秋の様相です。

9/5

10:00から選手登録 私はBグループ。

18:00からホテルのホールでオープニングセレモ  
ニーです。



9/6

9:00~12:00

Bela下流

今日は昼食を挟んで、試合と同じ時間設定で、午  
前と午後の公式練習が有ります。川はBelaの下流と  
上流です。

14:00~17:00



Bela上流。

土手を上がって見えて来たのは急な流れの堰堤  
下、直感ではチェコニフにもってこいの流れです。  
流せば、さっそく20cmギリギリのブラウンが上がり  
ました。

ここはチェコニフの本場と言っても良いはず  
なのに、どうも釣果が上がりません。本場ゆえに  
散々、毛針を見せつけられて、ここの鱒は擦れちゃ  
ったのでしょうか？そんな疑問を持ちながら、公式  
練習を終了しました。

21:00~22:00

キャプテン・ミーティング

9/7

第一試合 Session I

8:30~11:30 Poprad川

ここは、街に近い用水路ですね、  
早速、第1投目から当たりが有り、幸先よしと思う  
間もなくロスト。嫌な出だしですが、2投目にも来  
てランディング。ここは一級ポイントですし、無垢  
の第1戦ですから、もっと出ても良いはずですが、  
後が続きません。



段差毎に出るも、20cm以下の小物ばかりです。数はとくに ” つ ” 抜けしているのに記録は伸びません。結局カウント出来たのは2つでした。居るのに捕れない悔しさ、数釣るチャンスの第一試合だったのに思うようにいかない悔しさの残った試合でした。

昼食は街中のレストランで、定食が出ます。

第二試合 Session II  
15 : 00～18 : 00 Dedinsky湖



同乗者はベルギー選手です。前もって釣り場に移動して、開始クラクションの合図を待ちます。私たちは湖の中央で待機し、クラクションの合図で試合開始です。仕掛けはSAGEの9ft 7番ロッドにワカサギ・ポーラーベア・ストリーマーを着けシンキングIIIで探ります。

背後でライズしました。ベルギー選手と目配せしながら、他のボートに気付かれる前に釣りたい。ところがなかなか掛かりません。何度もなんどもキャストします。いつか掛かると信じて投げ続けます。

” あっ！ ” 水面まで追って来た。漸くして、かかったのは相手のベルギー選手。ここは邪魔にならぬ様に、私のラインを回収します。 ” おめでとう ” 良かったね。漸く一本上がりました。30cmオーバーの虹鱒、私じゃないけど。

更に投げ続けます。リトリブ。ぐるぐるローリーポーリー・・・

ドン！ 合わせる。竿が震えます。来た来た来たぞ～。

然程大きくは無いけど、鱒の手応えを手繰って、ネットに回収。 20cmオーバーの虹鱒です。移動途中で鱒がジャンプします。思わずストップ！コントローラに命令して、ボートを止めてキャスト再開するも、反応がありません。こんな事を何度か繰り返しているうちに、終了のクラクションが ” ブウウウウウー ” 終わりました。

9/8

第三試合 Session III  
8 : 30～11 : 30 Vha川



川幅は5mほどの川だが、流れはどんよりして、重い川です。流れにネットを刺すと持って行かれる、日本では経験したことのない流れです。

釣りとしてはドライ若しくはチェコニフ向きのようですが、水深は深く、ライズも無いので、チェコニフに決めました。試合開始と共に下流へ下っていきます。大きな石が入り、波立っている左サ



イドに流すと、最初に現れたのは尺越えのブラウンです。姿を見せただけで、数投を試みただけで食っては来ない。練習ならば、もっと試みるけれど、そこそこで場所を移動します。ステップダウンで下流に向かい。栈橋から外れるあたりで、大物がヒット。重い流れで、大きなネットは流れにとられ、ようやく手にしたのはグレーリングです。

群れているはずですから、更に何度も流しますが、後が続ません。

ビートの終点までくると砂地で、小振りな魚影が見えて、ようやく手にしたのは下限規則ギリギリのやはりグレーリング。この川はグレーリングだけで5本。

しかし、このコントローラにバッチリ気に入られて、競技ですけど、コントローラとは仲良くすべきの見本のようです。振り返ってみると私ってコントローラと上手くやる天才？

9/9

第四試合 Session IV  
8:30~11:30 Orava川



今日の川は大河で、川幅は100mほどです。隣の上流側のビートでは盛んにライズが起きているけど、どうやって攻める？って、チェコニフ仕掛けとストリマー仕掛けを持ちながら、探りはチェコニフを使い、最初に手にしたのはブラウン。

足場を変えるのに流したまま移動しようとする  
とグレーリングがポツリ。

もう一つ獲って、開始前にライズがあった上流点  
が気になり戻りますがライズもなく、全く手応えが

ありません。残念ながら、これで万事休す。第四試合は終わりました。

第五試合 Session V  
15:00~18:00 Bera川



道路から藪漕ぎで着いた流れは、今大会切っつの急流です。開始で一旦下流に下がってみましたが、生命反応無し。

一回渡って大岩が作る自然の堰堤下に向けてヘビーニフを送り込むが、底に着かないほどの急流です。今までの試合で鱒は追い立てられたのか、ヘビーニフを2個つけても反応がありません。水面ストレスに灌木が覆っています。サイドスローでようやく、対岸の縁に入りました。良し！ 入った。狙い通り、水中に魚影が動く。次の瞬間に竿を通じて大きな生命反応が有るも、このままじゃランディングができない。川下に流して、灌木の中から抜け出させ、中央の流れへ。

更にこちらに向けながら、上流へと誘導します。よし！ これで流れに乗せてランディング。Bela川での初ヒットはそこそこのブラウンでした。

次も行くぞと、流しますが、それっきりで一段上の流れにも居ません。一通り、上限まで上がって試すも、全く反応が有りません。流れは美しく最高の場所に見えるのですがね。それだけ、隠れ場も多いってことですけど。川を横断する度に体力を消耗します。

何度も転げそうになりながら、流れの中央を渡っていた時に当たりが来ましたが、大きくは無いけどリミットオーバーのグレーリングです。こんな急流でもグレーリングは居るのですね。これに続くグレーリングは出ず、これでお仕舞い。

五試合の全てが終わりました。

9/10

10:00～12:00

Conservation symposium(環境保全シンポジウム)

競技だけでなく、かならず環境保全シンポジウムがセットされ、開催国の保全事情などの現状や研究成果が専門家により発表されます。

16:00～16:30

バスで表彰式会場の Liptovsky Mikulas (リプトフスキー・ミクラージュ) へ移動します。

17:00～18:30

Awards & Closing Ceremony



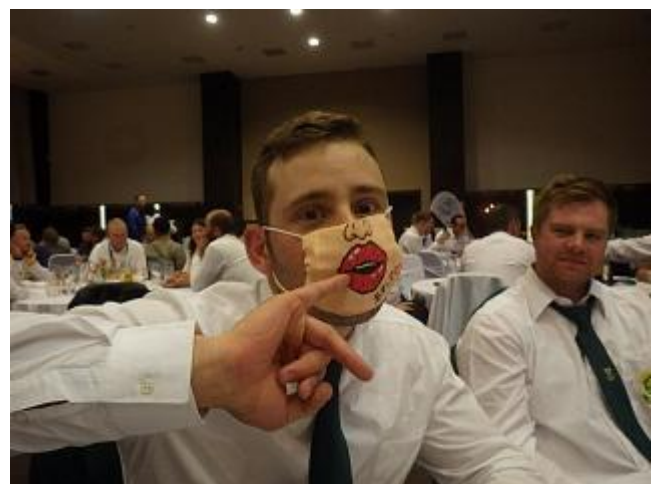
表彰式



金メダル France

銀メダル Czech Republic

銅メダル Spain



20:00～ Final Banquet

9/11 SAYONARA



## 今年新たに挑戦してみた釣り

鈴木 伸一

毎年新たな釣りにチャレンジするように心掛けているが、今年は、フライ・フィッシングに関してアメリカナマズ(英名 Channel catfish)釣り、それ以外の釣りではタイリクバラタナゴ釣りにも挑戦してみた。

何れの釣りも溪流魚を対象としたフライ・フィッシングのオフの時期にできるとあって、例年であればせいぜいフライ・タイイングやキャストイングの練習でもしてお茶を濁している時期に実釣ができるとは、しかも管理釣り場ではなく自然河川で釣りができるなんて大変ありがたいことである。

しかしながら、これらの魚はいずれも外来種であって、特にアメリカナマズ(*Ictalurus punctatus*)のような特定外来生物に指定された種に関しては、再放流に関し、都道府県毎に内水面漁業調整規則や内水面漁場管理委員会指示で規定されておりその扱いについては注意が必要である。



僕がアメリカナマズに興味を持ったのは、先ずはその大きさ、在来ナマズ(*Silurus asotus*)とは属のレベルでも異なり、アブラビレがあったり、

オビレは中央が切れ込み、かつ長大で、しかも体型は流線型であるため遊泳力に優れていると聞いていた点である。また、元々は食用に移入されたものであるため、食べてみたいとの思いもあったのは言うまでもなからう。

釣行日は12月24日、釣行を思い立ったのはこのところ恒例となっている、12月9日～10日にかけて、東丹沢は札掛で開催した Japan Fly

Casting Club と World Fly Fishing of Jpn との合同納会の際であった。その間には東京都釣りインストラクター連絡機構の役員会、J F C Cのミーティング、全釣り協での作業の他、町会の夜警などもあって十分な準備も出来ず、アメリカナマズの生態や食性といったものを調査する時間すらなかった。

そうは言ってもフライがないことには釣りにならない。釣行直前になって、アメリカナマズの生態については分からないまでも、ちょっとしたひらめきでウェイト入りのキールタイプ・ゾンカー#6を3色ばかり、それぞれ半ダースずつ巻きそれらにすべてを賭けてみることにした。



今回訪れた先は霞ヶ浦に注ぐとある河川。本来はサイト・フィッシングが可能とのことであったが、生憎、この時期はレンコンの収穫時とあって、川には蓮田から流れ出る泥水の影響でブラインドでの釣りとならざるを得なかったが、



外道のニゴイや



コイを含め、お目当てのアメリカナマズもものにすることができた。ガイドに徹してくれたKさんには只々感謝あるのみ。

当日、持参したロッドは彼のシャルル・リッツがスプリット・ケーン・ロッドに黒い腕章を巻き、それらの弱点を克服するためにコノロンのグラス・ファイバー・ブランクを用いてデザインしたものの一つである。このシリーズは、通称 Ritz Garcia LFL/LSHL rod と呼ばれており、



今回使用した竿はその中でも最強クラスの Garcia Conolon 2066 8' 10" Line WT 10-11 である。

そんな豪竿を使用したせいか、それに水位も低かったこともあってか、

アメリカナマズにはよく発達した二又した大きなオビレがあるものの、それ程走ることなく意外とあっさりとランディングできてしまった。きっと、夏場に霞ヶ浦に立ち込んで釣るのであれば、それこそハラハラ・ドキドキの連続と言った釣りになるのではないだろうか・・・

ここ暫くは通い続けてみたい釣りの一つである。

次に、タイリクバラタナゴであるが、この魚、見た目にもグロテスクで大型に育つアメリカナマズとは対極的なターゲットと言ってもいいのではないだろうか？



姿形、色彩が大変美しい上にどことなく品があり、釣りの対象魚としては、メダカと比べてもその体長たるや良い勝負である。小さいものになると体長2cmにも満たないので、市販の釣針を使用したのであれば、例え極小のタナゴバリであっても針掛かり



させるのは至難の業と言うか、むしろまぐれのような感じがしないでもない。

この釣りは、12月3日、JOFI埼玉の会長さんの計らいで企画していただき、JOFI埼玉の方の手ほどきを受けて始めた釣りである。手ぶらで来るように言われていたが、先ずは、その日最初の釣り場（止水）に案内されてびっくり。ヘラ師が釣り場の中央に向かって竿を振っているのに、タイリクバラタナゴ釣りの方は岸沿いに設置されている釣り専用の栈橋から岸に向かって屈んでいるではないか！ 遠目では何とも奇妙な光景である。



釣り座に到着して初めて分かったのであるが、釣り専用の栈橋と岸との間には幅にして1mにも満たない隙間があり、タナゴ釣りをされている方は岸に向かってその隙間に釣り糸を垂れているのである。こんな隙間であれば釣竿の長さは1mでも長すぎるくらいで、僕のタックルを持参したところでまるで役に立ちそうにない。

今回、釣りの指導をしていただいたIさん、実はこの方、仕掛けは本より、釣竿、浮子、餌箱は勿論のこと、釣り針までも自作してしまうほどで、今回お借りしたタックルも釣り糸、板錘以外はすべてIさんの手作りである。



そのため、止水にしろ、



ホソにしろ、そのポイントにベストマッチのタックル一式をお借りしての釣りなので、初挑戦と言っても、ベテランには程遠いもののそれなりに釣れてしまう。それに、何よりも釣針までが自製とあって、市販の釣針ではそう易々と針掛かりしない体長2cm前後の極小タナゴまでも難なく釣れてしまう。

タイリクバラタナゴ釣りをしていると、面白いことに同じ種類の魚を釣っていると言うのに、極小のターゲットに心血を注ぐ方と、大型と言ってもたかが体長10cm止まりではあるがその大型魚のみを狙っておられる方がいるようである。僕は未だ始めたばかりであるので、極小のタナゴであろうと美しく育った大型魚であろうと、釣れてくれれば喜びは変わらない。

Iさんのお仲間を観察していると、皆さん不治の病に感染しているようで、殆どの方が自製の竿や道具箱をお使いになっている。中にはIさんからライセンスを受け、釣針の自製にも手を出されている方もお見受けしたほどである。





僕も知らず知らずのうちにそのウィルスに感染してしまったようで、気が付いたときには、何処ぞやの竹藪から、布袋竹であろうか？ それとも真竹であろうか？ 竹の種までは分からないが長さ1 mほどの竹を3本頂戴してきてしまった。

来シーズンは自作の竿、とは言っても竿作りの道具はないので、まずは延竿ではあるが、現在、釣り人社発行 五代目東作 松本栄一著「和竿辞典」を参考にして、油抜きを終え、晒しの工程に入ったところである。なかなか癖のある個性豊かな竹ばかりである。果たして、そのうち1本でも使用に耐え得る竿に仕上がってくれるであろうか？



昨年は江戸前のハゼ釣り、一昨年はチェコニフ（czech nymphing）によるアユ釣り、マイクロ・フライ・フィッシング、一昨昨年は Banty によるフライ・フィッシングと、主にフライ・フィッシングに関してであるが、毎年のように僕にとって新しい釣りを経験するようにしてきた。そうそう、今年はひょんなことで東京鮎毛バリ釣り研究会にも入会させていただいたので、来年はアユのドブ釣りにも力を入れなくては。

このように毎年新しいことにチャレンジしていると、例えばアユの友釣りを覚えることにより、細い道糸を手繰り寄せての取り込み、掛かった魚の誘導方法と言ったものが学習できるし、クロダイのヘチ釣りを経験すると糸ふけの取り方、大型魚の往なし方、ブルーギル釣りでは素早い合わせのタイミングの取り方、タナゴ釣りでは微妙なあたりの取り方、繊細な仕掛け作りといった、特定の釣りばかりやっていたのでは知らずにいてしまう様々な経験ができるものである。

そして、このような経験は単に釣りの幅が広がるだけではなく、それらが様々な場面で相乗効果を発揮し合って、いざという時に思わぬ好結果となって役立ってくれるものでもある。

特に、釣りの指導を行う立場にある方や、競技の釣りを志される方は、己の引き出しを増やすためにも是非様々な釣りに挑戦してみてもは如何なものだろうか・・・

## 釣りの潮目（その2）

四条 徳明

今上陛下は来年4月末日のご退位が決まり、元号の平成も変わることになります。昭和8年ご生誕され齢84歳を超えられた陛下には、年間200日以上のご公務がお体に厳しいことが主なご理由とのこと。

同じ歳の自分も年ごとに衰えていく脳力・体力を自覚する日々なので、前号で紹介させていただいた釣友の病氣見舞いで3時間以上も釣りの潮目を論じ合ったのと、陛下が御退位を発表されたこととは、生物的に見れば同じ自然の表れなのでしょうか。

30年正月の年賀状準備をしているとき、例年より喪中連絡が多く、哲学的な釣りの話に時間をつぶした話相手もそのうちの一人となったことを知らされました。

思えば彼とは中学・高校と同じ校舎で学び、休みの日には月島や十号埋立地有明貯木場、芝浦周辺の水路に沢山係留されている家船（木造でポンポン船に曳航される貨物船でミヨシに家族が住んでいる。子供は水上小学校の寮に入る。）の間を、ハゼ、モヨ、セイゴなど釣り歩いた釣友で、高校卒業以降全く音信不通だったのが同期会の還暦祝会で再会、彼も釣りを続けていると聞いて、以後東京湾のキス、アジ乗合船から始まり、病床前にはインターネット情報で毎週のように下田から那珂湊までの関東沿岸を釣り歩いたものです。

結果的には病床見舞いは彼の冥土への手土産話になりましたが、近年の家族葬では本人しか知らない友達には結果の報告（告知ハガキ）だけにする方が多いようです。そうかもしれません。なまじ聞いたことのある名前の方から香典・お花代など戴いても、機械的な対応が増えるだけで、生前感謝の気持ちはお伝えできないでしょう。

彼の持っている竿や電動リールの中には、それなりに調子のいいもの、新しいものがありました。

ご家族には釣り具の知識や価値を全く理解する方がいないようで、処分をどうするか伺うことはできませんが、多分、燃えるごみと燃せないものとして処分してしまうでしょう。勿体ないな。

振り返って自分の場合を考えてみますと、終活の連絡名簿に JOFI 東京の方の名前はありません。また、潮目が変わったので、生涯釣りを楽しむために自分の体力・釣りものを考え、改めて持っている釣り具を整理してみると、よくまあこんなものをと自分であきれるような小物や糸がゾロゾロ出てきました。

竿に至っては、自分に合った撓り調子に加工したものなど数本や投げ・深場のビシ竿など、誰が見てもゴミになります。

潮目を越えた平成 29 年、延べ 34 回行きました。ほとんどが一人で、1 月 2 日の釣り初めから寒期は湾奥のフッコライトルアー、春は相模湾のサバライトルアー、夏から湾奥タチウオルアーや相模湾ワカシ・イナダのエサ釣り、暮れは赤い魚で外川のエビハナダイ（数）と片貝のコマセハナダイ（型）。

平成 9 年に事務所にパソコンが入ってから釣果を入力するようになって昨年末で 1,000 回を超えたので平均年間約 50 回ですから、回数は大きく減少しましたし、釣果も黒潮の大蛇行の影響とかがあるかもしれませんが、腕が鈍ったのか前捌きがもたつくようになったのか 29 年はあまり数釣りしたことはありませんでした。

12 月 22 日の片貝はお客が一人の貸切状態で、北西強風でかじかむ指でやっとオキアミを付けながら、ハナダイ 30 cm 級、27 cm 級 25 cm 級それぞれ 6 尾と、外道にイナダ、大ウマズラも混じって久しぶり 20 ㍺クーラー一杯。やっと 29 年を仕舞ました。

平成 31 年 4 月末で、今上陛下がご退位されるので、平成最後の 30 年も同じパターンの計画で釣りに行くつもりです。健康第一に、無理せず、事故に気を付けて。そして元号が変わったら、私の釣りも終わります。



## お宝コーナー

今年の夏は痛ましい水辺の事故が数多く発生しました。特に釣りに関しての事故は自己責任として扱われますので、自分の身は自分で守る必要があります。World Fly Fishing Championship におきましては、河川での釣りでさえライフジャケットの着用が義務付けられているほどです。

以下に僕が愛用している、安全な釣り七つ道具（内水面、特に溪流釣りに特化していますが）を紹介します。

### 1. ウェーディング・スタッフ





渡渉の際に使用する杖です。滑り易い河川や、そうでなくとも水深が膝の高さを超えてしまうと、流れによっては水圧に耐えられず足を取られてしまうことも、また、薄暗い時間帯や透明度の低い河川においてはつい目測を誤り深みに嵌ってしまうことも間々あるものです。

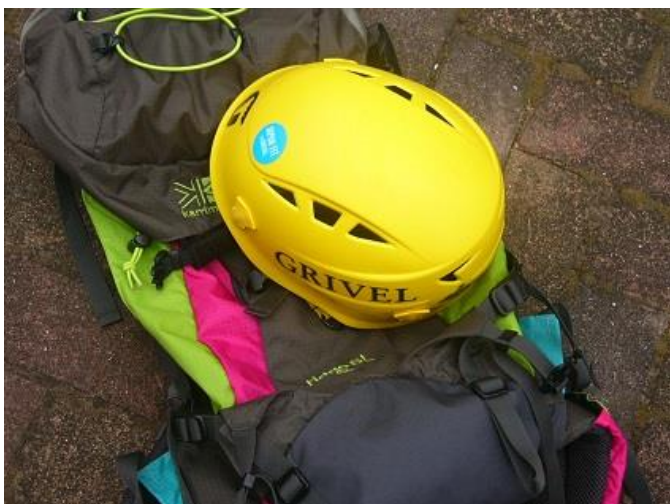
そんなときに心強い味方となってくれるものがウェーディング・スタッフです。大切な命を預ける道具ですので、携行性やデザインよりも丈夫な信頼出来るメーカーのものをお勧めします。

## 2. ライフジャケット



国土交通省によると、「ライフジャケットを着用することで生存率が2倍以上となり、海中転落時の生存率向上に高い効果がある」とのことです。内水面と言えど河川や湖の水難事故は後を絶ちません。湖の場合は固定式や自動膨張式が便利ですが、溪流においては手動膨張式が扱い易いです。

## 3. ヘルメット



溪流釣りの場合は、「EN 12492：ヨーロッパ規格」「UIAA106：国際山岳連盟規格」を満たした登山用ヘルメットをお勧めします。

## 4. ヘッドライト



暗闇で両手を自由に使う必要があるなら、ヘッドライトは必須です。山岳溪流ではあまり視野の狭いものはルートを見失ってしまう危険性があります。

## 5. 地形図



釣りの場合には、2万5千分1地形図が必要となります。5万分1地形図では川の様子までは読み取れません。

## 6. コンパス



地形図を正確に読み取るためには、コンパスは必須です。

## 7. 細引き



いざという時に役立つのが細引き。僕の場合は人の体重も確保できる 11mm の山岳用ザイルを使用しています。

## 2017年度活動実績

| 日付        | 活動実績                    |
|-----------|-------------------------|
| 04/23 (日) | 平成28年度定期総会              |
| 05/21 (日) | 親子マス釣り懇親会<br>マス釣り & BBQ |
| 07/22 (土) | 若洲シーサイドパークグルー           |

|                        |                                                                           |
|------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
|                        | プ、(公財) 日釣振東京都支部主催 第12回若洲海浜公園親子釣り教室への参加<br>釣り指導サポート                        |
| 08/20 (日)              | 全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参加                                                  |
| 08/27 (日)              | 第5回アウトドアフィッシングスクール in 若洲への参加<br>安全な釣り指導・魚の捌き方サポート etc.                    |
| 10/07 (土)              | ふるさと清掃運動会実行委員会主催ちょっといいこと「荒川でゴミ拾い」協力参加、及び模擬ルアー・キャスティング教室                   |
| 10/14 (土)              | 若洲シーサイドパークグループ、(公財) 日釣振東京都支部主催 第3回「初心者・ファミリー釣り教室」への参加、釣り指導サポート<br>荒天のため中止 |
| 10/23 (土)              | ヤマメ産卵床造成<br>渡良瀬川支流秋山川において                                                 |
| 11/11 (土)              | ヤマメ発眼卵埋設&稚魚放流<br>JOFI 西東京に協力参加                                            |
| 11/18～11/19 (土・日)      | 29年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験<br>スタッフ・講師を派遣                                 |
| 04/09 (日)<br>11/12 (日) | 渡良瀬川支流秋山川において<br>水産多面的機能対策発揮活動                                            |
| 01/19～01/21 (金・土・日)    | ジャパンフィッシングショウ2018への参加予定<br>ニジマス釣り等のサポート                                   |
| 01/20 (土)              | 釣りインストラクター・マスター研修会への参加予定                                                  |



|                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 4月より毎月<br>第2土曜日 | 若洲海浜公園釣り場における釣り場クリーンアップ、及び釣り指導 |
|-----------------|--------------------------------|

## 編集後記

今回は特に特集を組んだ訳ではありませんでしたが内水面に関する活動、釣り情報、釣りのルールなどに関したものが多く寄せられました。その中でも、日本ではなかなか手に入れることのできない World Fly Fishing Championship スロバキア大会の様子も克明に報告していただきました。今後の勉強会などにも是非反映させていきたいと思います。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て適宜特集を組んで発行していきたいと思います。原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛にEメール、又は郵送でお寄せください。勿論、集まり具合によっては期限を切って募集することもありますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。(N. S.)

### 東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌 第6号

発行日 平成30年1月15日  
 発行 JOFI 東京  
 (一社) 全日本釣り団体協議会 公認  
 東京都釣りインストラクター連絡機構  
 編集 同上 (広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>